

聖講習会を終る

「南無阿弥陀仏 合掌

この炎天下に血を以って彩り、涙をもって清められつつある聖講習会の皆様に捧ぐ。

ああ。奇しき妙なる因縁に結ばれし、同じみ名に生きる同胞諸兄弟達よ！皆様の涙ぐましい真剣な尊い講習会の有様、皆様の御姿が眼前に彷彿する。

同胞の皆様と、この聖講習会に一体に生きたい、その願いを持ちながら、遂に参加の出来なかつたことを残念に思いつつ、不遇の身をなげいています。真剣なる同胞は待つていて下さつたのに……私は今、あまりの悲しさに夜も眠られずペンをとりました。

体はここに、心はかしこに、たとえ憂世のさだめにて参加は出来なくとも、心は遠く、聖講習会に列席せる同胞と一体、自由の天地、ああ、この境地、見えざるに相見え、聞えざるに無声の声を聞く。

主管住岡先生の、苦悩いよいよ深くして大悲いよいよ深重だとのみ教、いよいよ深く味われます。

聖講習会の一週間、同志同胞はいよいよ血盟を固うせられ、これより一大猛運動は開始せられ、尊い聖戦は全国に拡大せられる日も遠からざることと信じます。

この聖講習会が聖戦の第一線に起つ同胞を信の溶鉱炉に熔き、化して一丸となし、南無阿弥陀仏の聖声、天地に轟かしつつ進軍することを憶う時、合掌せざるを得ないのである。南無阿弥陀仏の法音高く、胸問にきらめく本願の象徴、我が光明団員章の一切同胞の上に輝く、ああ、偉なる哉。

幸に同胞同志よ、法体を御大切に如来の御力の加わりて、いよいよ固く堅く、結盟、血盟を成就し、一致団結、以つて同胞を救済されんことを。

本部講習会に関して極力御尽力下されし東伯支部及び、鳥取県下の団員に深く深く感謝致します。この幹部講習に犠牲を払つて断行して下さつた本部に対して何と言つて御礼申し上げてよいか、言葉もございませぬ。只々深く感謝の合掌を捧げます。

合員御一同に合掌して御礼申し上げます。」

昭和六年八月二日 鹿島県芦品郡駅家校 佐藤階雄

我等の聖講習会はずでにスタートをきつた。

出席したくても、事情のために血涙をのんでいるもの、唯佐藤氏一人であろうか。

七月三十一日、午前八時二十分本部を出発したる一軍を、河内駅で迎えて、河内支部、中務静摩氏、川本要氏等と共に合流する。福山駅で、仏後の同胞を加え、更に倉敷において岡山石井の祖母を加え、伯仏線で旦元女氏を交え、午後五時、伯耆大山駅にて、朝七時小郡を出発してゆくゆく島根、米子の同胞を集合せる一団と合流して、午後七時前、東郷湖に面したる松崎駅に着いた。

駅頭、東伯支部の幹部に迎えられて、歓迎の辞と共に、団歌合唱、第二団歌の余韻、肺肝をついて、すでに熱涙を見る。夕陽、湖水の彼方に没せんとする頃、二隻の汽艇は同胞をのせて静かに東郷温泉に向う。

山陰ホテル、改称して望湖樓という。新装なつて我等を迎える。

その夜まず部署について、共に夕食をとり、相互に自己紹介を終り、旅の疲れを温泉に洗う。

八月一日午前五時半起床、体操、礼拝、講義……………我等の幹部講習会は遂に雄々しく火ぶたを切つたのである。

来り会するもの七十五名、一騎当千の武者、各地代表、新しく相見る未だ知らざりし同胞の顔。

大学専門教育を了えたる人、教職にある人、僧侶、商人、農業等、あらゆる種類の人を網羅しつつも、何故にこの一致ぞや、団結ぞや。平等に燃ゆるあるもの。

歎異抄と講習要項が皆の手に渡る。

第一篇 概論

第二篇 顕正

第三篇 破邪

第四篇 結論

概論から講義がはじまる。講義は私一人でひき受けることにして、他の先生方は各班について頂いて、そのグループ、座談会の中心になつて指導してもらう。

山口県 正覚寺 柳田西信先生

島根県 明覚寺 武井諦了先生

同 県 染香寺 河野直臣先生

同 県 浄円寺 柳井覚善先生

同 県 顕正寺 幡谷淳信先生

本団の陣営にこの五氏を加える。皆求道の人、第一日にかわるがわるお講話をお願いしたが、第二日からは講義は私のだけにして、座談に討論に中軸となつて活動して下さる。それよりも何よりも尊いのはこの方々の求道の態度、説教は出来よう、大衆をやんやと言わすことも出来よう。しかし敬虔に真理の殿堂に合掌し、謙虚にアイデアの前に聞くことが出来ようか。説くことを知つて求めることを知らざる説教者、徒らに化城に立てこもつて、高慢なる人の多い中に、新時代の腐敗しきつた中から、こうした真に生ききろうとする宗教人を生むことは嬉しいことである。既成教団は誰がヒイキ目に見ても崩壊の道をたどりつつある。教団自体が一大更生を要する時である。ここに出席して下さつた方々は、皆その地方の先駆者である。しかも頑迷なる教権一点張りの人たちからは、迫害に攻撃にあいながらも、しかもその中に活路を見出して生きぬこうとする懸命な方々のみである。教団は今にして自覚せねば、悔ゆるとも甲斐なき時がある。私はあまりにペンをそらした。私どもは本団の陣営に参加

して下さったこの方々にどれだけ感謝したか、そしてその謙虚な求道的態度に頭が下ったか。

聖人は一生求道の方であった。

私たちはこの酷熱の中に汗みどろになりつつ、熱心に聖講習会をつづけた。集った方々のこの粒のよき。昨年までの、あの便利な、そして風景のいい、そして勝手な、気まかせな、グウダラ講習と思いくらべて、私たちはどれだけ嬉しい思いにひたったか、集つて来られた一人一人のその真創な動機、鳥取県の片田舎、その真創と熱意が、会の上に反映する。

毎日朝食までに一時間、朝食後二時間、講義がすめばお昼食までを会員の意見発表に使った。女の方も男子にまさるほど堂々とやつてのける人がある。それぞれの個性を発揮する。歩んだ人の叫びはどこか響くものを持つ。わからぬことが解けたといつてよろこぶ人、明るかった心が暗くなつたともだえる人、でも一貫した生命は脈々として同胞の間を流れてゆく。

お講義がはじまる。皆で本願文と、本願成就文とを暗誦する。各班で本願文について大討論が行われる。そして最後に全員でそれをねり上げる。

午後は三時まで休息した。大概の人は眠っている。三時から一時間又は二時間お講義であつて、それから各班の座談会で花が咲く。たのしい夕食がおとづれる。そして夕食後は出来るだけ早く集つて、あの大広間で円陣を、又は集団をつくつて、座談、意見発表、又は団のことについて相談した。

大概十一時でなければ眠らない。でも中には一時二時まで語っている人たちもある。

一週間、講習といえは長い気のするものにきまつている。それだのに風のようにすんでゆく。

「こんな心のとけあつた、そしてなつかしい有益な講習会は初めてだ。」

それは先生方の共通の意見である。しかもそれは会員全体の感想である。

静かな夕暮れ、東郷湖上に団歌の音が聞える。

月の美しい夜、月光に躍る魚の数々が見える。

第五日の夜、私たちは幹部会議を開いた。東伯支部の西村先生が議長になる。私たちは様々な議案について練つたり討究したり、意見の交換をしたりしたが、結局左のスローガンを一致可決して、このスローガンを当面のモットーとして我等の聖戦を進めることにした。

光明団聖戦当面のスローガン

一、すべてを大乘的实践へ！

一、仏教の歪曲、反動化絶対反対！

一、本部を中央に！（大阪移転可決）

- 一、全国的に百支部実現！
- 一、我等の団結、光明団の拡大強化！

本部大阪市への移転は、一人の反対なく可決、本団の使命成就のために各支部共、奮起することになる。一々の項については又本誌にのせることにする。

六日の夜、東伯支部主催、会員慰労の大晩覧会が開催されて、夜の更けるのも忘れて各自の餽興に歌に氣勢をあげ、歓をつくした。最後に光明団万歳、東伯支部万歳が三唱されて散会。

いよく最後の日が来た。午前の講義がすむと、又会員の意見発表があつて後、幡谷先生の御感想発表があり、午後、最後の講義がすんだ。法務のために朝、武井先生が帰られたのを初めとして、今日出発しなければならぬ、河野先生、柳田先生、幡谷先生、その夜には大分減った。だが、我等は最後の夜にも大広間に集った。そして松浦千里氏の送別茶話会をかねて会談した。

私は松浦千里氏の北海道伝道の壮挙に対する、幹部講習会員の態度について特筆せねばならない。

「松浦氏が女性の身を单身、北海道開拓のために出発します、皆様の御声援をお願いします。」と口をきるや、松浦氏は更に感想を述べた。大会はこれに対して多大の賛意を表し、更に各員は金員を拠出して、誠意そのものの餞別を贈り、全員を代表して大阪支部脇本狂雲氏が涙ぐましくゲキレイの言葉を贈った。而して七日夜は、その行を盛にすべく茶話会を開催した。

時代は將に反宗教運動の時代である。大会は六日午前と午後交互にマルクス宗教否定について福山代表三谷文太郎氏より、その理論を聞いた。而して幹部会はこのままです仏教、特に大乘菩薩道の提唱、並びに実践への方途について講究し、いよいよ具体的進出へと結束を固め、団の拡大強化、百支部実現へのスローガンを掲げた。これより急速度を持つて拡大強化せられることであろう。

団の劃時代的幹部講習会は終了した。

新しく結束された団員たちは団歌のどよめきと共に万歳声裡に出発する。湖上はるかに汽艇の遠ざかる所、団歌の声、また涙にぬれる。別れるのではない、一船ごとに、同志を戦線におくるのだ、かくして団員章に象徴される金剛不壊の白道の実践者によって何が生れるのか。

幽霊群の中にその聖戦を拡大せよ。

汝の友にはたらきかけよ。

汝の街に、汝の村に、そして汝の社会に。

私たちは最後に出席を申し込みながら不可避の故障のために出席し得なかった中堅のために悲しむ。

山口県の火の如き法將軍刀弥哲夫氏は公務のために、幾通の手紙、電報で、その悲痛を訴えつつ、最後の日まで来会することが出来なかった。我等は真に待ちに待ったが、最後に、

「ゴ セイカイリ ゴ シユウリヨウヲ シユクシ シヨウライ ダ ンケツシテ
タカキネンガンニイキ マスマスダンノ ハツテンヲキシタシ フサンツウセキ
ニタエズ トネ」

この長電を受け取らねばならなかった、全法將軍の痛惜、察しても涙だ。我等はこの献身的な同志を幹部講習会に見出さなかつたけれど、列席者以上の敬意と親愛を遙かに山口県に向かつておくれた。なお、佐藤階雄氏の数通の手紙は、その度に会の意気をあげた。